

成人看護学実習（慢性期）の構築

—学びの深化を目指して—

高田 幸江¹⁾ 松本 文奈¹⁾ 高橋奈津子¹⁾

The Structuring of Adult Nursing Practice (Chronic Illness and Conditions)

—Striving to Deepen the Learning Experience—

Yukie TAKADA, PhD, RN¹⁾ Ayana MATSUMOTO, MSN, RN¹⁾
Natsuko TAKAHASHI, MSN, RN¹⁾

[Abstract]

At this university, since the 2013 academic year, we have conducted clinical trainings : a combination of one-week ward care and one-week outpatient care in adult nursing practice (chronic illness and conditions). In 2014, we created a tool to indicate “course objectives and the key points for training” by which we could share the contents and methods of teaching in order to help achieve the practical goals of clinical instructors and students in each department, thereby enhancing cooperation in teaching. In 2015, we firmly incorporated ward care practice for five days in the first week and outpatient care practice in the second week. On the final day, we established a “Conference for Integrating Learning from the Practice for Chronic Illness and Conditions,” providing students with the opportunity to combine learning experience in the ward and outpatient nursing practice with examining the nursing of patients with chronic illness and conditions. Furthermore, based on the findings of an instructor survey, we developed the sheet to share the educational methods to help university teachers and clinical instructors collaborate in developing teaching that promotes the readiness of individual students. In this paper, we report on the content of the practice we addressed in 2015 toward deepening the learning experience of students.

[Key words] nursing for chronic illness and conditions, outpatient nursing practice, ward nursing practice, the deepening of learning

[要 旨]

本学では、2013年度から成人看護学実習（慢性期）において、病棟実習1週間、外来実習1週間を組み合わせた臨地実習を行っている。2014年度は「指導ポイントツール」を開発し、各部門の臨床指導者と、学生の実習目標達成に向けて指導内容や指導方法の共有を図り、指導連携を強化した。2015年度は、1週目に病棟実習を5日間、2週目に外来実習を固定して構成した。実習最終日に「慢性期実習学び統合カンファレンス」を設定し、学生が病棟実習と外来実習での学びを統合し、慢性期看護を考察する機会を設けた。また、指導者アンケートの結果を踏まえ、「指導内容共有シート」を作成し、学生の個々のレディネスに合わせた指導連携を図った。本報告では、学生の更なる学びの深まりに向けて取り組んだ2015年度の実践内容を報告する。

[キーワードズ] 慢性期看護、外来看護実習、病棟看護実習、学びの深まり

1) 聖路加国際大学看護学部 成人・高齢者と家族の看護領域 成人看護学（慢性期） St. Luke's International University, Adult, Gerontological, and Family Nursing (Chronic Illness and Conditions), Faculty of Nursing

I. はじめに

慢性・長期的な健康問題を有する患者の医療実態に合わせ、本学では、2013年度から成人看護学実習（慢性期）において、病棟実習1週間、外来実習1週間を組み合わせた臨地実習を行っている。成人看護学実習（慢性期）の構築に向けた準備と、2013年度実習概要については、前々号¹⁾に報告した。2014年度は、成人看護学実習（慢性期）では多部門に渡り学生が実習を行うため、学生が2週間の実習でそれぞれの療養の場の特性を踏まえて学習を深め、目標達成できるように、実習目標の共有および指導方針の共有を図り、臨地の指導者と協働する必要があった。このことから、「目標達成のための指導ポイントツール」を開発し、臨地実習指導者と協働して学生の実習指導を行うことができた。この取り組みの詳細については、前号²⁾にて報告済である。2014年度の取り組みによって、実習目標において学生に学ばせたい内容とその具体的指導方法について共有化を図ることができたが、実際の実習指導においては、学生個々のレディネスに合わせた個別的な指導が必要とされる場面が多く、課題として残った。また、2014年度までは、病棟実習から開始する学生と、外来実習から開始する学生とが混在していたことにより、最終的に病棟と外来での学びを統合する機会がなく、学生自身が実習レポート課題の中でそれらの学びを統合する形態となっていたため、学びの到達度に差が認められる場合があった。

これらの課題を受け、2015年度は、慢性期実習の学びをより深めるための取り組みとして、実習構成の見直しと、臨地実習指導者との学生の個々のレディネスに合わせた指導連携をより強化するための取り組みを行ったため、ここに報告する。

II. 実習目標・実習構成の見直し

1. 実習目標の再検討

2014年度は、患者や家族自身が主体的に病いと共に生活を再構築していくことを支えることの中核概念として、「患者の強み」を活かした看護実践の展開を学生が意識できるように、実習目標の中に明文化した。2015年度は、生活者としての側面により着目させることを意図し、対象理解の具体的達成目標において、「発達課題や発達段階の特徴を踏まえて対象を理解すること」という項目を追加した他、本学の理念でもある、PCCの概念について、実習目標に明文化した。

2. 実習構成の変更

2015年度の成人看護学実習（慢性期）の構成を、資料1に示す。

すべての学生の実習構成を、1週目を病棟実習から開始し、2週目を外来実習に固定した。例年祝祭日を挟む実習クールの場合、病棟実習が4日間となってしまうという現実があった。このような場合、学生の実習実践内容が、看護過程の展開において実施・評価までに留まり、評価に基づく計画の再修正と実施の段階まで到達しにくいという指導上の課題が、病棟の臨地実習指導者から多く指摘されていた。このことを受け、1週目の病棟実習は、祝祭日を挟んだ場合であっても、5日間確保し、それ以降の実習期間の4～5日間を外来実習の期間とした。病棟から外来という実習構成とした理由は、実際の患者の受療過程に沿った構成とすることで、それぞれの場において看護として関わるべき視点の違いとその連携について、初学者の学生にとっても理解しやすくなることを狙ったものである。

また、学生が慢性期看護の役割を、患者や家族の現在までの軌跡から将来を見据えた長期的視点で捉えられるようになるには、最終的に病棟、外来で得た学びを統合することが必要である。このため、実習最終日午後に「慢性期実習学び統合カンファレンス」を新たに設けた。カンファレンス前半は、最大で7部署に分かれて外来実習を行った学生が、それぞれの部署で学んだ内容を共有する機会とした。カンファレンス後半は、病棟実習と外来実習を統合するためのディスカッションの機会とした。今回の新たな取り組みにより、学生の学びがどのように促進されたかについては、実習中であり詳細な評価ができていないが、ディスカッションの中でそれらが学生自身の学びとして発表できており、ある一定の効果が生じていると捉えられる。現在、実習終了時のアンケートにおいて、外来実習と病棟実習を組み合わせた実習形態において学んだことについて、学生が記載する欄を設け、協力を依頼しており、昨年度の学生の学びとあわせて検討したい。

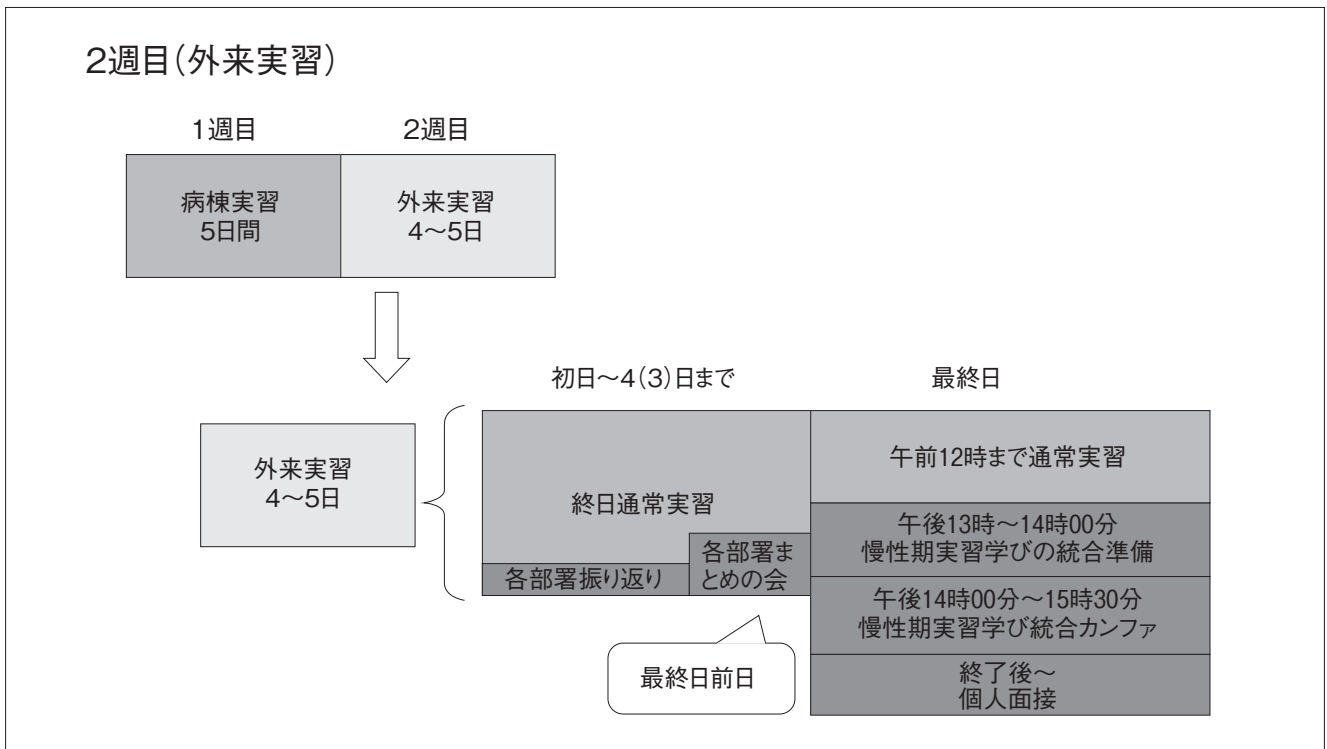
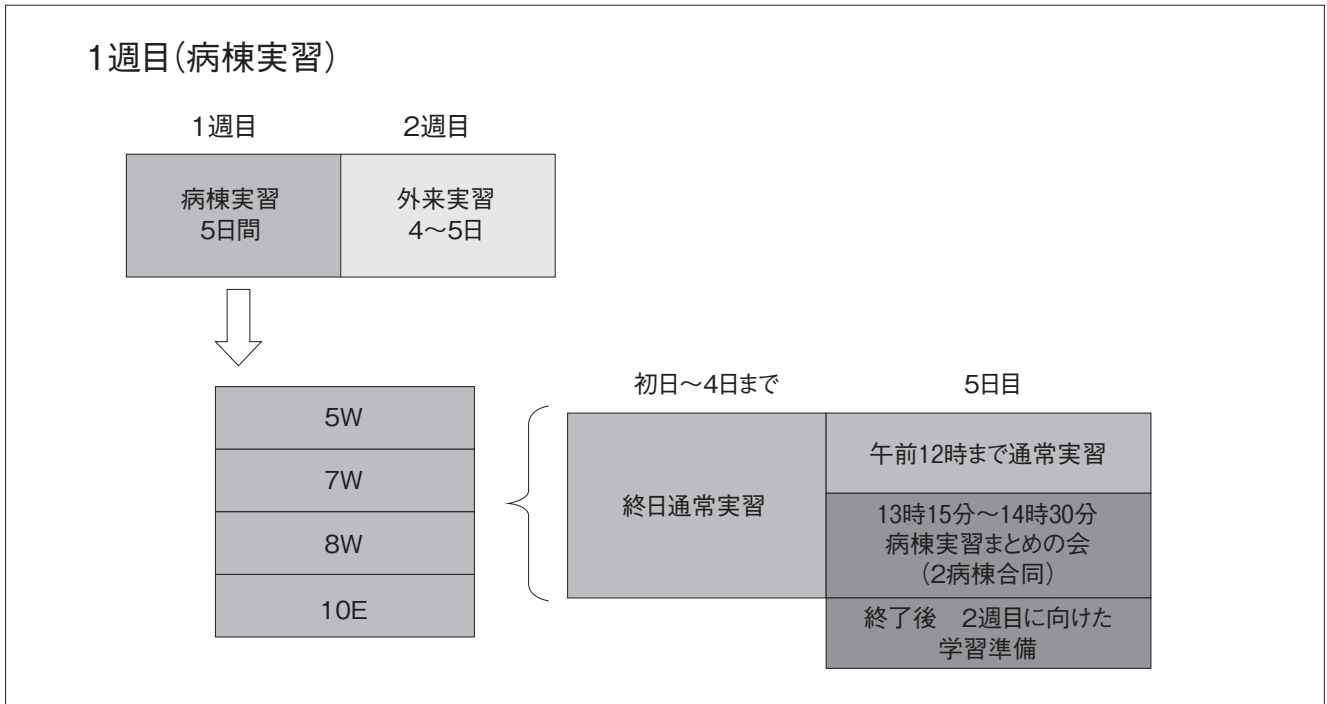
III. 指導連携の取り組み

1. 病棟・外来それぞれの部署における連携を高めるための取り組み

2014年度の実習まとめの会においては、病棟・外来の学部実習担当者から、自分の部署以外で学生がどんな学びをしていくのかを意識した指導の必要性について意見が出され、病棟・外来間の指導連携が学生の学びをさらに促進する可能性があることが確認された。このことから、2014年度に開発した「目標達成のための指導ポイントツール」を、2015年度の実習構成を元に、部署以外の取り組みを共有した上で、自部署で実習指導が行えるように改変した（資料2）。

加えて、前述の慢性期実習学び統合カンファレンスに

資料1 成人看護学実習（慢性期）の構成



は、病棟、外来双方の学部実習担当者が参加できる機会とし、それぞれの部署での指導の連携について知ることができるように工夫した。これらの実際の効果については、実習中盤に学部実習担当者を対象としたアンケートを実施し、確認を行う予定である。

2. 学生の個々のレディネスに合わせた指導連携

本学では、学生数増加に伴い、100名近い学生が成人看護学実習（慢性期）を履修する。同じ実習目標を達成することをめざし、個々の学生が実習に取り組むが、実際には一人ひとりの学生の特性は異なることから、個々のレディネスに合わせた指導連携が必要である。このため、大学教員と各部署の学部実習担当者が行う指導の効果をより高めるためには、個々の学生に合わせた指導目標と方法を共有する必要があると捉えられた。先行研究³⁾によれば、実習指導者の教育ニーズとして、教員と指導計

護学実習（慢性期）を履修する。同じ実習目標を達成することをめざし、個々の学生が実習に取り組むが、実際には一人ひとりの学生の特性は異なることから、個々のレディネスに合わせた指導連携が必要である。このため、大学教員と各部署の学部実習担当者が行う指導の効果をより高めるためには、個々の学生に合わせた指導目標と方法を共有する必要があると捉えられた。先行研究³⁾によれば、実習指導者の教育ニーズとして、教員と指導計

資料2 成人看護学実習（慢性期）目標達成に向けたスタッフ・指導者・教員の協働

実習の流れ		スタッフ	学部実習担当者 (NM, ANM, Inc.)	教員 (TA)
当日 朝まで		・実習目標と実習内容, 実践してもよい看護ケアを理解する	・実習目標・方法, 実習体制をスタッフに周知し受け入れ体制を整える	・実習目標・方法を NM, 学部実習担当者へ説明
			・実習体制・看護ケアや医療処置がどこまで実施可能か相談し, 申し合わせる (学生の健康問題などの状況も含む)	
1 日目	午前	【病棟オリエンテーション終了後】 ・シャドーイングでは, 学生に看護実践を見せる (学生ができることは参加させる)	・看護管理者とともに実習目標に適した患者を選択・打診し, 受け持ち患者情報シートを記載 ・実習初日の午前中のシャドーイング (NS 1人につき学生 1~2人アサイメントする)	・実習オリエンテーション (学内) 後, 学生を病棟へ誘導 ・患者へ説明し, 実習の最終許可を得る ・学生が受け持ち患者及び担当 NS へ挨拶できているか, 確認・促す
	午後	・受け持ち患者のケアを翌日から主体的に展開できるようにケアに参加させる	※学生がケアに参加できているか確認し, 必要時, 担当 NS とご調整下さい ※15時頃病棟実習終了, 学内学習へ	
1 週目		学生の出欠状況, 健康状態について連絡・調整 ※病棟実習期間中の, 遅刻・欠席については, 病棟 (7:30-45), 大学の双方に学生が直接連絡します		
	2 ~ 4 日目	・学生から, 看護計画の報告を受ける ※朝の時点で, 日々の計画と経過記録 (様式2) の〈看護問題〉と〈看護活動 (実習スケジュール)〉を, ご指導下さい ・看護実践の助言と指導, ロールモデル ・学生と一緒に「活かした」看護実践を行って下さい。 ・学生の報告を受け, 実践した看護ケアを評価できるようにフィードバックして下さい	※学生が全体スタッフへ向けて「朝の挨拶」をします。場の調整をお願いします ※朝の時点で, 日々の計画と経過記録 (様式2) の〈看護問題〉と〈看護活動 (実習スケジュール)〉を, ご指導下さい ・看護実践の助言と指導, ロールモデル, スタッフとの調整 ※学生が担当 NS へスムーズに報告できるよう, 橋渡しをお願いします	※2病棟の学生指導体制となるため, 朝不在となる日があります ・日々の計画と経過記録 (様式2) の助言と指導 ・実習記録物の内容, 看護過程についての助言と指導 ・看護実践の助言と指導, スタッフとの調整 ・病棟実習まとめの会の計画・運営についての助言 ★記録物の指導について ・その日患者のケアを行うに際し, 患者の状況に合ったプランになっているかをご助言下さい。看護過程に関する実習記録の書き方などは教員が主に指導します
		・日々の計画と経過記録 (様式2) についての助言と指導 ・学生の看護計画について, 臨床の視点での助言・指導 (スタッフカンファレンスで / 日々の振り返りで) ・学生の思考プロセスを確認した上で, NS の思考プロセスを学生に伝え, 一緒にその日のケア内容や看護方針について検討して下さい。 ・看護問題の解決に向け, 患者の個性・強みを活用できているかどうか, ご助言下さい		
		〈指導内容共有シート〉を活用して, 学生の学習状況など連絡・共有		
5 日目	午前	【~12:00まで】	前日同様	・学生と共に受け持ち患者へあいさつ
	午後		【13:15~病棟実習まとめの会】 ・会に参加, 学生の学びが深まるように助言を行う ・病棟スタッフに学生の学びや成長を伝える	・学生の学びが深まるようファシリテート

実習の流れ		スタッフ	学部実習担当者 (NM, ANM, Inc.)	教員 (TA)
当日朝まで		・実習目標と実習内容、実践してもよい看護ケアを理解する	・実習目標・方法、実習体制をスタッフに周知し受け入れ体制を整える	・実習目標・方法をNM、臨地指導者へ説明
			・実習体制・看護ケアや医療処置がどこまで実施可能か相談し、申し合わせる（学生の健康問題などの状況も含む）	
		・受け持ち患者候補者を選定		
2週目	初日	学生の出欠状況、健康状態について連絡・調整 ※外来実習期間中の遅刻・欠席については、外来部署、大学の双方に学生が直接連絡します		
		・適宜、看護実践の助言と指導、ロールモデル	・学生の受け入れ、部署オリエンテーション、休憩室及び学生用PCなどの説明 ・患者候補者を学生に簡単に説明、患者決定 ・患者へ説明し、実習の最終許可を得る ・外来実習1日目（様式4）の記録の〈実習目標〉の報告を受け、適宜ご指導下さい	※教員が6～7の外来部署を、順にラウンドします ※原則として、1週目に病棟実習を行った教員が、継続して外来にラウンドし、実習調整・実習記録指導を行います ・日々の計画と経過記録（様式2）の助言と指導 ・実習記録物の内容、看護過程についての助言と指導
		・学生と一緒に「活きた」看護実践を行って下さい。 ・学生の報告を受け、実践した看護ケアを評価できるようにフィードバックして下さい	・看護実践の助言と指導、スタッフとの調整、ロールモデル ・日々の計画と経過記録（様式2）についての助言と調整 ※朝の時点で、外来治療の場における実習記録用紙（様式5）の〈実習目標〉、〈担当する患者の看護問題〉、〈看護活動（実習スケジュール）〉の報告を受け、適宜ご指導下さい	・看護実践の助言と指導、スタッフとの調整 ・慢性期実習学びの統合カンファレンスの計画・運営についての助言
	2～最終日前日	<p>・学生の思考プロセスを確認した上で、NSの思考プロセスを学生に伝え、一緒にその日のケア内容や看護方針について検討して下さい</p> <p>・看護問題の解決に向け、患者の個性・強みを活用できているかどうか、ご助言下さい</p> <p>★記録物の指導について ・看護問題の抽出、看護計画作成は、1週目に指導しています。外来では、①生活の場で療養を続けているという観点から、②（必要に応じて）安全に治療を行うという観点から、その日の看護問題や優先順位、計画が患者の状況にあってるかをご助言下さい</p>		
（指導内容共有シート）を活用して、学生の学習状況など連絡・共有 外来実習中盤、指導者ミーティング実施				
最終日	午前	【～12：00まで】	前日同様	
	午後	【14：00～15：30（予定） 慢性期実習学び統合カンファレンス】 学部実習担当者、臨地指導者はカンファレンスに参加、学生の学びが深まるように助言を行う。病棟スタッフに学生の学びや成長を伝える		

画を調整し役割分担することや、学生個々の実習状況に応じて指導するなどがあることが明らかになっている。学生のレディネスに合わせて大学教員と指導者が指導連携することは、学生の学びの促進のために効果的であるだけでなく、学部実習担当者の教育ニーズを充足することにもつながる可能性があると考えられた。このため、2015年度は、「指導内容共有シート」（資料3）を開発し、さらなる指導連携に向けて取り組んだ。

指導内容共有シートは、学生一人ひとりの特性を踏まえて、具体的到達目標のどの部分を、どのように指導したかについて、大学教員、臨地実習担当者が記載する欄を設けた。2014年度までの指導連携を振り返ると、病棟においては教員と学部実習担当者が指導内容を共有する機会を頻回に確保することができていたが、外来においては診療の流れの中でタイミングよく指導内容を共有することが難しいという課題があった。このことから、「指

導内容共有シート」内に、外来の学部実習担当者と中間ミーティングを行うための機会を設けるための時間調整の項目を設けた。忙しい診療業務の中にあっても、学生の実習指導の内容を教員と学部実習担当者が共有し、後半の実習においてどのような視点で指導連携を図るかの方向性を共有することを狙って工夫を行った。これらの効果については、前述したように、学部実習担当者を対象とした中間アンケートを実施し、評価する予定である。

IV. まとめ

成人看護学実習（慢性期）において、病棟実習と外来実習を組み合わせた実習を構築してから本年度で3年目を迎えた。本報告においては、学生の学びをより深めるための取り組みとして、実習構成の再構築の実際と、学生の個々のレディネスに合わせた指導連携のための取り

資料3 指導内容共有シート

指導内容共有シート					
					クール目
	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
臨地記入欄					
大学記入欄					

*特に指導内容の共有が必要な事案を記入する。
 ※実習配置表の、該当部署配置の上から順番に番号を付与して記載する。記載者はサインをする。

	候補	決定 (◎が記入されます)
外来中間調整日時 (15分程度を予定、第2候補まで記入下さい)	①	
	②	

組みについて、その詳細の実践報告を行った。このような構成で実習を行っている看護基礎教育課程は未だ少ないが、疾病構造の変化や治療の外来移行などを踏まえると、看護基礎教育において外来実習を行うことの意義は大きいと考える。現在、実習の進行過程であり、2015年度の取り組みが、学生の学びにどのような効果を与えているのか、実際に指導に当たっている学部実習担当者がどのように評価しているのかについての認識については、明らかになっておらず、今後の課題としたい。

引用・参考文献

- 1) 飯岡由紀子, 高田幸江. (2014). 病棟実習と外来実習を組み合わせた臨地実習成人看護学実習(慢性期)の構築. 聖路加看護大学紀要, (40), 112-117.
- 2) 高田幸江, 高橋奈津子, 松本文奈. (2015). 病棟実習と外来実習を組み合わせた成人看護学実習(慢性期)における指導体制強化に向けた取り組み. 聖路加国際大学紀要, 1, 40-45.
- 3) 中山登志子, 舟島なをみ. (2015). 「教育ニードアセスメントツール—実習指導者用—」の開発 — 実習指導者の役割遂行を支援する看護継続教育の実現に向けて —, 日本看護研究学会雑誌, 38 (1), 73-83.